

連体修飾節のテイタの意味について —「途切れ」を中心に—

王 守利

1. はじめに

日本語のAspectに関してはこれまで多くの研究がなされている。しかし、連体修飾節の場合はあまり研究されていない。また、Aspect的意味ではテイタはテイルと一緒に扱われるのがほとんどであり、テイルとは異なるテイタ特有のAspect的意味に関する研究は少ない。

これまでテイタのAspect的意味として主に「動作の持続」「変化の結果の持続」「反復・繰り返し」、「経験・記録」が指摘されてきたが、本稿は連体修飾節のテイタのAspect的意味に注目し、連体修飾節のテイタの考察を通じて、「途切れ」というAspect的意味を考える。また、以下の例のように、文の自然さを判断するのは日本語学習者に無理であるが、テイルとテイタの区別に関して、何か使えるルールがないかも併せて検討したい。

(1) ??見物している患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。
(岩崎 (1998:53))

(1) 見物していた患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。
(同上)

2. 先行研究及びその検討

2.1 途切れについて

テイタの「途切れ」というAspect的意味は秋月 (2003) において提唱された。秋月 (2003) は「ちょうど先生の話をしていたところです」などの文における「ていたところだ」の文法的性格について考察し、「ところだ」に前接する「ていた」は独自のAspectを表すものとして「途切れ相」¹と名付けた。つまり、

¹ 途切れ相という用語を次のように定義している。

「動作の継続や思考・感情の状態の持続が、動きが完成したり行為者の意志によって終わるのではなく、動作や思考・感情の主体の外部の出来事によって切れ目を生じ、その後も同じ動作や思考・感情の状態が続くのかどうかが決まっていない局面」(秋月 (2003 : 59))

「していたところです」を使えば「先生」がその場に入ってきたときの「話」が中断した局面を取り出して表現する（秋月（2003：60））のである。

秋月氏は「テンス的には現在に対する一時的後退性、アスペクト的には<途切れ>を表す用法があり、「テいたところだ」における「テいた」は、「ところだ」の作用によりこの用法のアスペクト的な側面が取り出されたものである」（秋月（2003：53））と述べているが、「途切れ」という意味が「ところだ」だけでなく、連体修飾節一般の文脈においても見いだせるのではないかという疑問が残される。

2.2 連体修飾節のテイタについて

「一般に連体節中のテイタ形はテイル形で置き換えることが可能な場合も多い」（中畠（1995：30））が、テイタのすべてがテイルに置き換えられるわけではない。中畠（1995）は、次の例を挙げている。

- (2) ……定価を守っていた百貨店も、対抗上昨年暮れから安売りに走り、定価を設定する意味合いが薄れた。 （「朝日」94.8.14）

「これらの例では連体節で表された事態がその後打ち消され、以前の事態と対照的な事態が生じていることが主節で表されている。そこで有効に機能しているのがテイタ形である。……傍線部の動詞をテイル形にすると、連体節と主節で意味が矛盾することになる」（中畠（1995：30））

つまり、例(2)は、「事態の継続が途切れて新しい事態が生じた」（中畠（1995：29-30））ことを表している。このような連体修飾節でテイルに置き換え不能²のテイタの意味を「途切れ」とすれば、連体修飾節のテイタには途切れの意味があることになると考える。

テイタが「途切れ」という意味を持ち、かつこれがテイタの独自のアスペクトの意味であるという点で中畠（1995）の主張は秋月（2003）と共通している。また、「途切れ」は「持続していた状態が途切れる」という基本的な意味を表すが、「ところだ」文と連体修飾節では文の構造が異なるため、途切れの特徴も異なると考える。つまり、「ところだ」という文脈では、前述した「途切れ相」という文法的性格を有するが、連体修飾節という文脈では、途切れが違う様相と特徴を見

² 本稿でいう「テイルに置き換え不能」は、日本語母語話者の判断によるものでなく、調査事例の分析によるものである。

せていると考える。

さらに、「途切れ」を表す例文は多く見られるが、それらが「テイルで置き換え不能」であるという特徴を持つことについては、これまであまり注目・研究されてこなかったのが現状である。中畠（1995）は途切れの意味について前述した記述に止まっており、このような文のテイタの特徴についてさらなる検討が必要である。たとえば、以下のような用例である。

(3) 杏子は、笑いながら言うと、子犬の首輪とかごとを結びつけているリボンを解いた。 (『あした来る人』)

(4) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほうを見た。 (『赤い指』)

二例とも連体修飾節で表された事態がその後打ち消され、主節において対照的な事態が生じるが、その際、テイルが使われている。これらは中畠（1995）の反例のように見えるが、連体節で「途切れ」のテイタを使うときには、ある条件が必要となるという点に関して、中畠（1995）では検討されていないため、反例のように見えてしまうのだと本稿は考える。

3 研究対象と本稿の目的

連体修飾節は内の関係と外の関係と区別する³のが一般的である。(寺村(1975-1978、1984))。「途切れ」を表す場合、連体修飾節で表された事態がその後打ち消され、対照的な事態が生じるというのが基本であるが、外の関係の場合は、連体節は主名詞の具体的内容を述べるだけなので、主節の事態との対照的な関係は見られない⁴。さらに、これまでの調査の範囲では、外の関係の連体節のテイタが途切れを表す例が確認されていないため、本稿では、ひとま

³ 寺村（1975-1978、1984）に「サンマを焼く男」と「サンマを焼く匂い」を例に、内の関係と外関係を区別している。つまり、主名詞が連体節と意味的格関係にあるような修飾を内の関係（寺村（1984：207））といい、主名詞が連体節との間に格関係がないような修飾を外の関係という。

⁴ たとえば、以下のような用例である。連体節が主名詞の内容だけを説明し、連体節と主節との対照的關係が見られない。

日本で、H I Vで汚染された非加熱血液製剤を危険と知りながら血友病患者に投与し続けていた事件が発覚した。 (人類サバイバルの条件)

ず、テイタの「途切れ」の意味は内の関係の連体節にのみ現れると考え、考察対象を内の連体修飾節に限定することにする。

さらに、内の関係の連体修飾節は限定的連体節と非限定的連体節⁵に分けられる。限定的な場合は、主名詞に対し限定を加えるのに対し、非限定的な場合は、主名詞に対して情報を付加するという一般的な見方⁶に本稿は立っている。本稿は内の関係の連体修飾節におけるテイタの途切れの特徴を明らかにするのが目的である。

4. 考察

4.1 非限定的連体修飾節の場合

4.1.1 連体節と主節との関係

非限定的連体修飾節をめぐって、連体節と主節との意味的關係に関する研究は益岡（1997）、庵他（2001）、日本語記述文法研究会（2008）などが挙げられる。非限定的連体修飾節は情報を付加するという機能を果たすことに共通している⁷。先行研究をまとめ、並べてみると、以下の表1になる。表1からわかるように、情報付加はさらに「対比・逆接」、「原因・理由」、「継起」、「付帯状況」に分けられる。

⁵ 限定的修飾節と非限定的修飾節は制限的修飾節と非制限的修飾節（庵他（2001）、三宅（1995）など）とも呼ぶ。内容の面では同じだと考えられる。本稿では「限定的修飾節」と「非限定的修飾節」（寺村（1984）、日本語記述文法研究会（2008）、益岡（1997））を使う。しかし、この二つの区別は必ずしも明確にされているとはいえない。これについては加藤（2005）に考察がある。

⁶ これに関しては先行研究における認識はほぼ同じだと思われる。

「限定とは、修飾される名詞（これを主名詞と呼ぶことにする）の表す集合を分割し、その真部分集合を作り出すはたらきを指す」（金水（1986：606））一方、「非限定的な連体成分の機能は、背景、理由、詳細説明などの情報を主文に付加する所にある」と金水（1986：607）は指摘している。また、金水（1986：608）は、一般に限定的連体には焦点が置かれ易く、情報付加連体には焦点が置けないと指摘している。

日本語記述文法研究会（2008：50）は、修飾節が主名詞となる名詞が表すものの集合の中から、指示対象を限定して取り出す働きをするのは限定的修飾節であり、修飾節によって指示対象を限定する必要がない名詞に対して補助的な情報を付け加えたり、主節の事態に対する背景的な事態を提示するといったはたらきをする修飾節は非限定的修飾節であるとしている。本稿はこの定義に従う。

⁷ 「情報付加ならざるもの」（益岡（1997：173）が言う「述定的装定」の表現）は考察範囲から外したもので、ここで取り上げていない。

表 1： 非限定的連体修飾節の述語と主節の述語の関係

関係 (機能上)	非限定的連体修飾節の述語と主節の述語の	益岡 (1997)	庵他 (2001)		日本語記述文法 研究会 (2008)
			意味関係	動詞の制限	
情報 付加	対比・逆接	逆接・対比	なし	逆接的内容、対比	
	原因・理由	原因・理由	なし	原因・理由	
	継起	継起	動作的な動詞に限られ、タ形	継起	
	付帯状況	付帯状況	結果状態を表す動詞のテイル形かタ形、または形容詞	付帯状況	

庵他 (2001) の「動詞の制限」の説明から分かるように、連体修飾節のテイルとテイタの場合、連体節と主節との関係は「付帯状況」、「逆接・対比」、「原因・理由」があると示している。例 (5) は、「逆接・対比」の例で、例 (6) は「原因・理由」の例で、例 (7) は「付帯状況」の例である。

(5) 外出していた政恵が帰ってきたので、昭夫は自分の印象を語った。

(『赤い指』)

(6) 去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていた私には今日明日にも令状のくる心配があった。

益岡 (1997 : 169)

(7) 昭夫はため息をつき、カーテンから離れた。ソファに腰を下ろした。

「どう？」ダイニングチェアに座っていた八重子が訊いてきた。

(『赤い指』)

途切れを表すときに連体節と主節との対照的事態が見られる点では、途切れの意味がでてくるのが可能になるのは、「逆接・対比」の場合のみであると考えられる。

4.1.2 格関係一致

以下の二例とも連体修飾節で表された事態がその後打ち消され、主節において対照的な事態が生じているが、例 (8) はテイタが使われているのに対し、例 (9)

はテイルが使われている。

(8) 開け放っていた⁸縁側の戸をしめると、にわかにはガラス戸越しに見る夜が
ふかくなったように思われた。 (『氷点』)

(9) (4の再掲) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほう
を見た。 (『赤い指』)

非限定的連体節で途切れを使うときの条件について、本稿は格関係一致の角度から考察する。主名詞と連体修飾節の間に格関係がある一方で、主名詞と主節の述語の間にも格関係がある。先行研究(高橋(1994)、日本語記述文法研究会(2007)など)は、ほとんど主名詞と連体節の格関係だけを扱っているが、主名詞と連体節の格関係と、主名詞と主節(主節の述語)の格関係と、両者の格関係(一致可否)にはまだ触れていない。

例(8)は、主名詞が縁側の戸で、「縁側の戸を開け放していた」、「縁側の戸を閉める」という関係で、主名詞は連体節に対しても主節に対しても対格をもつので、格関係が一致している。一方、例(9)は、主名詞「ガラス戸」は、連体節の述語「開けっ放しになっている」に対して主格の関係をもち、主節の述語「閉める」に対して対格の関係をもつ。格関係が一致していないことがわかる。例(8)は「開け放っていた」状態が、主節の事態により中断され(途切れて)、状態が変化し、閉まる状態が生じた。「縁側の戸」が対象であり、対象の状態の変化が見られる。

(10) (5の再掲) 外出していた政恵が帰ってきたので、昭夫は自分の印象を語
った。 (『赤い指』)

例(10)は、連体節の「外出していた」状態が、主節の事態が実現されたことにより中断され(途切れて)、状態が変化し、「帰ってきた」という新しい事態が生じた。ここでは「政恵」が動作の主体であり、主体の状態の変化が見られる。

つまり、格関係が一致する場合、主名詞が主体として主格に立つ場合も、対象として対格に立つ場合も、連体修飾節と主節は同一の主体(或いは対象)を共有しており、連体修飾節と主節は、同一主体(或いは対象)の矛盾した状態を表すことになる。したがって、連体修飾節の状態と主節の状態とが同時に存在すると

⁸ 「開け放つ」は、他動詞で、「開け放す」の老人語(『新明解国語辞典 第五版』)で、「開け放す」に同じ(『大辞泉』)。

いう解釈はあり得ず、連体節の状態が途切れ、状態が変化し、新たに主節の状態が生じたという解釈になるのである。これは、中畠（1995：30）が指摘している「テイル形にすると、連体節と主節で意味が矛盾することになる」という意味だと考える。ここで連体節の状態と主節の状態に連続性が見られる。その一方で、次の例のように、テイルが含まれる連体修飾節の場合も連体節と主節と対照的事態が見られる。

(11) (3の再掲) 杏子は、笑いながら言うと、子犬の首輪とかごとを結びつけているリボンを解いた。 (『あした来る人』)

(12) (4、9の再掲) 開けっ放しになっているガラス戸を閉め、昭夫は玄関のほうを見た。 (『赤い指』)

以上の二例は、主名詞（リボン、ガラス戸）は、主節の対象（「杏子がリボンを解いた」、「昭夫がガラス戸を閉める」）でもあるが、連体節の主体（「リボンが子犬の首輪とかごとを結びつけている」「ガラスが開けっ放しになっている」）でもある。連体節と主節と同じ対象（主体）を共有していないので、連体節の状態と主節の状態が矛盾していない。この場合は、テイルもテイタも両方許されると考える。

4.1.3 調査

この格関係一致の視点からみる途切れの特徴を確認するために、合わせて9作品の小説（『あした来る人』、『黒い雨』、『青春の蹉跎』、『ノルウェイの森』、『赤い指』、『点と線』、『証明』、『人間の証明』、『氷点』）を対象として、非限定的連体修飾節で連体節と主節と逆接⁹の関係を表すテイルとテイタの例を集めて調査した¹⁰。「ていた」「でいた」「ている」「でいる」¹¹の形式を主な調査対象とした。

⁹ 次の例は「対比」と思われるが、「逆接」とは言いにくいものと考えて、考察対象から排除した。

「稽古も大変だけれど、雑事が多いのよ。ところが面白いことに、いつも茶の間にごろごろしている連中が、こんな時はよくやってくれるんだからねえ。会場やら、プログラムや会券の印刷からポスターまで、いつのまにか役割が決まっちゃってね。おかげで助かるわねえ」（『氷点』）

¹⁰ 連体節のテイタとテイルは文末のテイタ、テイルより数が少ないうえ、連体節と主節との関係を「逆接」に限定するため、さらに数が少なくなった。限定的連体修飾節と非限定的連体修飾節の区別は必ずしも明確ではないので判断するときに迷うところもある。今後数を増やすうえに、時間を置いてまた見直したい。

¹¹ 「てた」「でた」など省略された形は、連体修飾節では考えられないため調査対象に入れ

また、調査するとき、次のような例を除外した。たとえば、

(13) 梶は今まで結んでいたネクタイを解いて、赤いネクタイに結び替えた。

(『あした来る人』)

「今まで」があればテイタが確実に選ばれるので、不適切である。「今まで」以外は、「それまで、これまで、今日まで、昨夜まで、～(動詞)まで、先刻」などがある。これらはすべて対象外とした。以上のような条件に符合しているものは合計で 112 例であった。調査結果を表 2 にまとめた。

表 2：格関係一致の視点からの調査結果

視点	テイタ	テイル
格関係一致	83	0
格関係不一致	12	17

連体修飾節におけるテイルの格関係の一致の例が 0 例であることから、テイタが含まれる連体修飾節は、連体修飾節と主節との格関係一致が特徴であることがわかる。また、83 例の用例数からわかるように、「途切れ」の連体節での使用率が高いことも窺える。

テイタが含まれる連体節で格関係が不一致である場合の用例が 12 例ある。たとえば、次のようなものである。

(14) 僕はずいぶん長いあいだベッドの中でじっとしていたが、思いなおしてベッ

ドから出て、床に落ちていた時計を拾い上げ、月の光の方に向けてみた。

(『ノルウェイの森』)

検証事例：(15) 部下の二人が敵の腕を掴み、銃を取り上げた。残りの二人が関谷を引き起こし、落ちている銃を拾い上げた。

(『白鳥殺人事件』)

これらの例は、連体節と主節と同じ対象(主体)を共有していない。連体節の状態と主節の状態が矛盾していないので、テイルもテイタも許されると考える。

さらに、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(中納言)で検証してみた。「落ちる」の他動詞は「落とす」であり、「落ちている%¹²を」、「落ちていた%を」、「落

ていない。

¹² 「%」は、0 個以上の任意の文字列(例:国立%所⇒「国立国語研究所」「国立社会保障・

としている%を」、「落としていた%を」の4項目を設置し、連体節と主節とが「逆接」の関係を表す非限定的連体修飾節を調査対象とし、用例数をそれぞれ調べた。「落ちている%を」、「落ちていた%を」は格関係が一致していない。「落としている%を」、「落としていた%を」は格関係が一致している¹³。調査結果を次の表3にまとめた。

表3：格関係一致可否と連体修飾節のテイタ・テイルの使用の関係

調査項目	用例数（条件に符合した用例数）
落ちている%を	21 (18)
落ちていた%を	62 (23)
落としている%を	24 (0)
落としていた%を	18 (4 ¹⁴)

格関係が一致していない場合は、「落ちている」(18例)と「落ちていた」(23例)が使われている。一方、格関係が一致する場合は、「落としていた」(4例)が使われているが、「落としている」(0例)が使われていない。格関係が一致していない場合は、連体修飾節のテイタをテイルに置き換えることが可能であるが、格関係が一致している場合は、テイルに置き換えることができないと見られる。

このように、非限定的連体修飾節のテイタが「途切れ」を表すとき、連体節と主節とは逆接の関係にあり、かつ主名詞が連体修飾節に対する格と主名詞が主節に対する格が一致することが特徴であることがわかる。

4.2 限定的連体修飾節の場合

4.2.1 考察範囲

限定的連体修飾節の場合、テイルとテイタの置き換えの関係には、次の三つの

人口問題研究所」など)の記号である。

¹³ 「落ちている%が」、「落ちていた%が」、「落としている%が」、「落としていた%が」なども調べたが、条件に符合した用例数が全部で5例足らず、あまりに少ないため、ここで主なデータとして取り上げないことにした。

¹⁴ 例えば、次のような用例である。

同い歳の人や歳下の人がお父さんより偉くなって、一杯お金を稼いでいても？」膝上に視線を落としていた利治が顔を上げ、まっすぐに城山の瞳を射抜いた。 (『カリスマ』)

場合があると考える。

一つ目は、文意を変えずにテイタとテイルを置き換えられる場合である。

(16) 太郎は、隣で座っている/座っていた女の子に声をかけた。

(岩崎 (1998:47))

(17) 先生は、さっきからさわいでいる/さわいでいた学生に注意した。

(岩崎 (1998:52))

二つ目は、文意を変えずに置き換えにくい場合である。

(18) (1の再掲) ??見物している患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。 (岩崎 (1998:53))

(18') (1'の再掲) 見物していた患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。 (同上)

三つ目は、テイタとテイルを置き換えられるが、文意が変わる場合である。文意が変わらないことを前提とすれば、テイルに置き換えられないことになる。

(19) 人からのアドバイスは、停滞していた状況を変えるヒントになることがある。 (1分間でやる気を出す200のヒント)

テイタの場合は、連体節で表される事態は過去、現在及び未来などの状況を表すことが可能であるが、テイルに置き換えると「今現在の状態」に限定することになると考える。

本稿では連体節のテイタの「途切れ」はテイルと置き換え不能と考えるため、以下は、上記の二つ目の場合と三つ目の場合について検討する。

4.2.2 状態変化

まず、二つ目の場合で「途切れ」を表すテイタの例をみる。

(20) グロズヌイ首都救急病院の院長、アエロエフ・ヤヒヤさん(45)はアフガン戦争に軍医として従軍、「あの惨劇は二度と繰り返してはいけない」と訴え、大統領派、反大統領派の衝突に備えていた。その恐れていた事態が今、現実となっている。 (毎日新聞 95. 1. 7)

中畠(1995)は途切れの特徴を「連体節で表された事態がその後打ち消され、以前の事態と対照的な事態が生じている」という点に見ているが、上記の例は連体節と主節との対照的事態とは言いにくいものである。本稿は連体節の

「状態変化」という点に途切れの特徴を捉えている。例(20)は、連体節の「恐れていた」が「事態」を限定修飾し、主節の事態が起こらなければ(「現実となっていない」限りでは)、連体節で表された事態(「恐れている」事態)が続いていたはずである。主節の「現実となっている」状態が実現された時点で連体節の状態に変化をもたらし、連体節の状態を途切れさせたのである。

さらに、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(中納言)で検証してみた。「恐れていた」を検索し、185例のうち条件に符合したのは31例で、なかに24例が「途切れ」の意味である¹⁵。主節の述語は「ついに起きた、起きちゃった、起きていた、起こった、起こってしまう、現実のものに、現実となってしまった、確認された」など連体節の状態の変化を示したものであるのに対し、「恐れている」の212例を確認したが、こういった連体節の状態の変化を示す述語は一例もないのである。

また、同じ主体や対象を共有しかつ連体節の状態が変化した場合はテイタが使われている。

(21) (1、18の再掲) ??見物している患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。 (岩崎(1998:53))

(21') (1、18の再掲) 見物していた患者たちは、小川看護婦の説得で病室内に引き揚げていた。 (同上)

文の自然さが判断しにくいものの、ここではテイルに置き換えにくいと見られる。この場合は、テイタが途切れを表すと考える。理由は連体節と主節とが同じ主体を共有し、連体節の状態と主節の状態は同時に存在するわけがないので、「見物していた」状態が途切れてから「引き揚げた」状態になることが可能になったからである。ここで「小川看護婦の説得で」は連体節の状態に変化をもたらした原因を示している(そうでなければ、「見物していた」状態が続いていたはずである)。

(22) 雨と寒さとのため、始めは海岸に群がっていた見物人たちも少しずつ戻りはじめました。 (『沈黙』)

¹⁵ 他の例は例えば以下のようなものである。
予期していたのはわたしではなかったからだ。会うのをこんなに恐れていた相手はリーだった。「動くなら、ゆっくりにして」彼女はいった。 (『沈黙のセールスマン』)

以上の例は「雨と寒さとのため」は連体節の状態に変化をもたらした原因を示している。三宅（1995：53）は「連体修飾節は、名詞句が不定指示の場合は制限的であり、定指示の場合は非制限的であるといえる」と指摘している。「ていた学生」「ている学生」を例に中納言で調査してみた。「ていた学生」は23例のうち、4例が途切れの用法である¹⁶。たとえば、以下の用例である。

(23) 千九百三十七年に中国の抗日戦争が勃発して、海外の学生は国難に赴くために次から次へ勉強をやめて帰国することになった。日本に留学していた学生もほとんど全員が帰国した。四十年間続いた第一次日本留学ブームは、これで幕を閉じた。（『現代中国人の日本留学』）

一方、「ている学生」は、主節は静的述語¹⁷の場合が多く、動的述語の場合が少なく、91例のうち、「途切れ」の用法が確認されていない。例えば、(24)は主節が動的述語の場合である。

(24) さらに、困ったことに千九百八十年代からは、学生運動が盛んになり、勉強はそっちのけで南北統一、反米、南北学生交流などといった政治的な主張を掲げるデモばかりしている学生が増えた。このような学生を、「運動圏にいる」と表現する。（『韓流の源』）

以下のテイタが含まれる連体修飾節を比べてみよう。

(25) 病院の薬局で14日分までと支給制限されていた薬は、何日分までに増えた？ a 20日分 b 30日分 c 40日分 （毎日新聞 95. 1. 3）

テイルの場合は、連体節の状態と主節の状態の対照的な関係が見られないが、テイタの場合は、連体節の状態が変化したことが主節で表されていることがわかる。

また、「仕事」を限定的連体修飾節の対象にして、「ていた仕事を」と「ている仕事を」を例に中納言で検証してみた。「ていた仕事を」は14例のうち、「以前、

¹⁶ 4例のうち、非限定的連体節が判断される例が出ているという2015年1月24日に関東日本語談話会で庵功雄先生のご意見をいただいた。非限定的連体節と限定的連体節を判断するには迷うところが多く、判断にゆれが出ていると思われるが、非限定的な場合も限定的な場合も、連体節と主節とは同じ主体（対象）を共有し、かつ連体節の状態に変化がある場合はテイタが使われるという結果に影響を与えていないと考える。

¹⁷ 砂川（1986）は述語を静的述語と動的述語に分けている。静的述語は述語を静的な事柄を表すものを指す（名詞ダ、イ形容詞、静的動詞、ナ形容詞ダなど）。動的述語は動的な事柄を表すものを指す（動的動詞）。

生前、(今、それなど)まで」などテイタが确实選ばれる例を除き、「途切れ」を表すのは7例がある。たとえば、以下の用例である。

- (26) 基幹的な役割を担う中堅の従業員が長期休業を取得することは、たしかに職場にとっては短期的に支障が生じると考えられる。しかし、それを契機に、休業を取得した従業員の担当していた仕事を職場の若手従業員に割り振ることで、若手従業員にとっては能力開発、能力発揮のチャンスとなり、仕事の幅を広げる機会と位置づけることができる。

(『男性の育児休業』)

主節と連体節とが同じ対象「仕事」を共有し、「中堅の従業員が長期休業を取得する」が連体節の変化の原因として示され、連体節の状態に変化をもたらし主節の状態になるので(休業を取得した従業員の担当していた仕事を職場の若手従業員に割り振ること)、テイタが使われるのだと考える。

一方、「ている仕事を」の22例のうち連体節の状態変化が見られる例は一件もない。たとえば、以下の例は、同じ対象を共有しながらも、連体節の状態の変化が実現されないため、テイルが使われるのだと考える。

- (27) ポールはけっして気持ちを表に出さない人間だと思っていたからだ。皿を洗うのまで一緒に、私が手伝おうと言うと、ふだんふたりでしている仕事を三人で分担するにはどうしたらいいか途方にくれるありさまだった。何もしなくていいよと、ポールは言った。(『夜明けの挽歌』)

次に、三つの場合の連体節のテイタの例を見たい。この場合は、文意が変わらないことを前提にすれば、テイタとテイルに置き換えられないといえる。特徴としては、外的な出来事によって連体節の状態に変化がもたらされ、その変化が主節で表されることである。この場合は、主名詞に後続した事態はル形の場合が多くみられる。前述したように、「途切れ」の主な特徴は「連体節の状態変化」にあるので、この場合のテイタは「途切れ」の用法と考える。

- (28) <ブノワ・マンデルブロー博士> フラクタル理論を1975年に提唱した数学者。…中略…「フラクタルは、不確かなものとして科学の世界から追放されていた絵や視覚を復権させる試みだ」と話す。

(毎日新聞 95. 1. 9)

- (29) (19の再掲) 人からのアドバイスは、停滞していた状況を変えるヒント

になることがある。(1分間でやる気を出す200のヒント)

例(28)は、連体節の事態はニュースを書いた95年の過去にあるだけでなく、95年の書いた時点でも存在するにちがいない。「フラクタル」は「絵や視覚」の「科学の世界から追放されていた」状態に変化をもたらす原因として示されている。(29)は「ことになる」は主節であり、「人からのアドバイス」は連体節の持続していた状態を途切れさせる原因を示している。

このように、限定的連体修飾節の場合は、連体節の状態変化はテイタが途切れを表す主な特徴といえる。また、非限定的な場合は、格関係一致という特徴がみられるのに対し、限定的な場合は、格関係が一致する(例21、22、23、25、26)場合と一致しない場合(例20、28、29)の両方がみられる。そのうち、連体節と主節と同じ主体や対象を共有しかつ連体節の状態が変化した場合はテイタが使われることは非限定的な場合と共通している。

4.3 「途切れ」の特徴

以上、連体修飾節を非限定的な場合と限定的な場合においてテイタの「途切れ」を考察した。

非限定的連体修飾節の場合は修飾節を取り除いても文意が大きく変わらないのに対し、限定的連体修飾節の場合は修飾節を取り除くと文が成り立たなくなるか文意が変わることになる。こういう違いがあるため、連体節のテイタが途切れを表すとき非限定的連体節とは違う様相を見せている。

非限定的連体節では、連体修飾節と主節とは逆接的な関係にあり、連体節の状態が変化し、かつ格関係が一致するという特徴がある。一方、限定的連体節では、連体節の状態変化はテイタが「途切れ」を表すときの主な特徴であり、格関係が一致する場合もあるが、格関係が一致しない場合もある。

まとめてみると、連体節の状態に変化があるという点は連体修飾節のテイタが途切れを表す特徴だといえる。また、連体節と主節とが同じ主体や対象を共有しかつ連体節の状態が変化した場合はテイタが使われるという点は、非限定的な場合と限定的な場合とで共通していることがわかった。

4.4 連体修飾節の「途切れ」への検討

4.4.1 他のアスペクト的意味との関連

以上の考察から分かるように、テイタが表す途切れの意味は、主名詞に後続した事態（主節の場合が多いが、例（29）のような場合もある）との関係から判断されるもので、文脈に依存している。本稿ではこれを語彙的意味から判断できる「動作の持続」「変化の結果の持続」とは区別している。

(30) 避難していた人たちはみんな情報に飢えていた。…（中略）…ところ

が、「こうした身近な生活情報はメディアからでは得にくい」という声が多かった。 (毎日新聞 95. 1. 19)

(31) 艦に死者のごとく倒れていた水夫の一人が突然、叫びました。その指さす水平線から一羽の小鳥が飛んできました。 (『沈黙』)

例（30）は動作持続の例で、例（31）は変化の結果の持続の例である。連体節の持続状態のなかに同時に主節の事態があるという点から、連体節の状態にはいずれも変化が見られないのである。

しかし、文脈が与えられると、「動作持続」と「途切れ」の意味と重なる場合もある。

(32) それまで両手で胸のところに支えるようにして持っていた帽子を、八千代の方に差し出した。 (『あした来る人』)

「それまで」がつくと、主節時までの動作持続が読み取れる一方で、連体節と主節との対照が見られ、連体節の状態の変化があることから途切れの意味も読み取れる。

伊坂（1997：133）は「文中や文脈に付加的な要素が加わると、他方の意味になることがある」と述べている¹⁸。例（31）の主節を例(33)に変えると、テイタの意味が「途切れ」に変わることになる。

(33) 艦に死者のごとく倒れていた水夫の一人が突然、立ちました。(作例)

山田（1984：148）は「ふつうは、動詞のアスペクト意味が文脈の中で他の要素と相互干渉を起し、そこから文アスペクトが定まると考えられている」と述

¹⁸ 文脈からの影響については、藤井（1976）、高橋他（2005）、工藤（1995）などの先行研究にも触れている。

べている。連体節のテイタの意味を判断する際、主名詞に後続した事態との関係をみなければならぬと考える。

4.4.2 テンス

三宅（1995）は、三原（1992）が提唱した「視点の原理」は限定的連体修飾節の場合に成り立つが、非限定的修飾節はこれに従わず、常に発話時視点により時制形式が決定される、と述べている。岩崎（1998）は限定的連体節のテンスを詳しく考察するものである。絶対的テンスの視点を発話時においているので「発話時視点」を取っていると呼び、相対的テンスの視点を主節時においているので、「主節時視点」を取っていると呼び、以下の結論を出した。

	内の関係
従属節：タ／主節： タ	発話時視点
従属節：タ／主節： ル	主節時視点

(岩崎(1998 : 56)から抜粋、一部修正)

連体節のテイタが途切れを表すとき、連体節の状態が変化し、主名詞に後続した状態になるわけであり、連体節の事態が常に主名詞に後続した事態の前に現れ、常に連体節が前、主名詞に後続した事態が後という前後関係があるので、相対的テンスを表すというのが適切であろう。

4.5 「完了」の検討

庵（2001）は工藤（1995）のパーフェクトを「完了」と「効力持続」¹⁹に解体すべきであると主張した。以下の例を挙げ、「効力」をもたず、基準時以前に動作や出来事が完結したことだけを述べるものを「完了」とし、過去完了としてテイタを認めている（庵（2001 : 90-92））。

(34) (テレビのニュース) 俳優の渥美清さんが一週間前に亡くなっていたこ

¹⁹ 「効力持続」の場合は観察時以前の動作・出来事の効力が観察時において認められることに焦点がある（庵（2001 : 88））。

とが分かりました。 (庵 (2001 : 77))

(35) 昨年、本因坊治勲と小林光一天元が相次いで 1000 勝を達成したが、大竹英雄九段も昨年 5 月に到達していたことが分かった。 (同上)

江田 (2013) は、テイルとテイタのアスペクトを詳しく調査し分析したものである。テイタはテイルにはない用法がある (江田 (2013 : 6)) という指摘に本稿は賛成している。

江田 (2013 : 17) は「基本的に庵 (2001) の考え方を採用し…中略…「ている」「ていた」を用いて基準時が過去・未来で、それ以前に動作・作用・出来事が完了したことだけを述べるものを「完了」²⁰ (完了①とする、筆者注) として以下の論を進める」と述べた一方で、「「ていた」については「完了」という別の考え方 (「完了」②とする、筆者注) を使う。その理由は、「ていた」では庵 (2001) が指摘しているように効力の存在が読みきれない例が見られるためである」と述べている (江田 (2013 : 19))。この「別の考え方」としての「完了」(「完了」②) は、「「ていた」節が「た」節より以前を表すものである」(江田 (2013 : 189)) と述べ、以下の用例を挙げている。

(36) 科学的には過去への旅は夢物語だと思われていた。ところが驚いたことには、1988 年暮れ、アメリカの物理学者 (中略) が驚異的な説を発表した。 (江田 (2013 : 141))

(37) 日本人からみると、アメリカの老人は老いてもたいへん若々しく装って、私などもその方が好ましいと感じていた。しかし、やがてわかったのは、アメリカの社会では、あくまで若さが要求されているということであった。 (江田 (2013 : 194))

²⁰ 「完了」①について、中島 (1995) にも触れている。「意味解釈上、注目すべきものとしてさらに一点取り上げたいのは主節の述語に「分かった」「明らかになった」等がくる場合である。」(中島 (1995 : 30)) と指摘し、「タ形を用いずテイタ形を用いたのは従属節の事態の発生以後その影響の持続があったことを示すためである」と指摘している。例えば、次の用例である。

(41) NHK の人気番組「生きもの地球紀行」で、南米の淡水魚を「サケの仲間」として放送していたことがわかった。 (中島 (1995 : 30))
これは工藤 (1995) の過去パーフェクトにあたるが、庵 (2001) はこのような例は「効力」(つまりここでいう「影響」) を認めず、「完了」としている。ここで、中島 (1995) は「過去パーフェクト」の用法 (前述の「完了」①) と「途切れ」は別のものとして考えている。

「完了」①は動作や出来事が完結していることを意味し、挙げた例の「なくなった」「到達した」は「動作・出来事」の「完結」とは言えるが、「完了」②の「思われた」「感じた」は「動作・出来事」の「完結」とは言いにくいものとする。効力の存在が読み取れないテイタの意味として「完了」①と「完了」②が確認できたといえるが、「完了」①と「完了」②は異なる意味だと思われる。

「完了」の文は、ある状態が存在していたところ、「た」節によって状況が変化したことが示される。」(江田(2013:200))というところは、連体修飾節が「途切れ」を表すとき、連体節の状態変化が主節で表されているところと似ている。

(36)を例にすると、本稿の考えとして、「アメリカの物理学者が驚異的な説を発表した」ことがテイタ節の変化をもたらした原因を示し、「科学的には過去への旅は夢物語だと思われていた」ことが変化し、「過去への旅は夢物語だ」とは思われなくなったということを述べている。つまり、外的出来事によってテイタ節の持続していた状態を途切れさせ、後ろの状態になったということである。そうでなければ(このような外的出来事が出なければ)、「過去への旅は夢物語だと思われてい」たはずである。タ節はテイタ節の持続していた状態を途切れさせ、テイタ節の変化をもたらした原因を示していることがわかる²¹。

しかし、「途切れ」で次の文を解釈するには無理がある。「足が痛くなった」ことにより車に乗っていた事態を途切れさせることができないからである²²。

(38)行く途中に車乗ってた時から、か一つ痛くなつちやつた、足が。

(江田 (2013 : 189))

また、「完了」②では、「ていた」節に対して「た」節が状況が変わったこと

²¹ 連体修飾節にもこういった例がある。

(36) 自分はすべて計画どおりに幸せな人生を歩んできたというのは、詐欺師でもなければいえないせりふかもしれません。昨今の状況を見れば、倒産しないと思われていた大企業が破たんしたり、入社時に終身雇用をうたっていた企業が早期退職制度を導入したりと、変化のスピードは加速しており、5年先を読むことは難しい状況にあります・

(<http://jibun.atmarkit.co.jp/lcareer01/rensai/jinzaisv06/jinzaisv01.html>)

この例は、連体節の状態変化の原因となる「外部の出来事」が示されていない。秋月(2003)は「途切れ」の場合「外部の出来事」が必須の条件であるが、本稿でいう「途切れ」はそうではない。連体節の状態変化の原因となる「外部の出来事」がある場合もあるが、ない場合もある。「連体節の状態の変化」があることが必須の条件であるとする。

²² この例は江田(2013)は「完了」と認めたが、2015年1月24日の関東日本語談話会でこの例は完了の意味ではなく間違っているという庵功雄先生のご意見をもいただいた。

を表現する必要がある（江田(2013 : 195)）と指摘しているが、次の例のように、「完了」②では解釈しにくいものだと考える。なぜなら、一つには、連体節の「恐れた」は心理動詞であり、「完結」とはいえないものだからであり、もう一つには、主節の事態が実現された時点で恐れていた事態が途切れたので、連体節と主節との間に連続性が見られ、これは「「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目が存在すること」（江田（2013 : 201)）という「完了」が使われる条件に矛盾しているからである。

(39) (20 の再掲)グロズヌイ首都救急病院の院長、アエロエフ・ヤヒヤさん

(45) はアフガン戦争に軍医として従軍、「あの惨劇は二度と繰り返してはいけない」と訴え、大統領派、反大統領派の衝突に備えていた。その恐れていた事態が今、現実となっている。（毎日新聞 95. 1. 7）

テイルにないテイタの意味が注目されつつ、どうやって統一的に説明できるかはまだ検討する必要があると思われる。

5. まとめと今後の課題

本稿は連体修飾節におけるテイタの「途切れ」の意味を考察した。連体節と主節とは同じ主体や対象を共有し、かつ連体節の状態が変化した場合はテイタが使われることが分かった。この点は日本語学習者のテイタに対する理解に少しでもお役に立つことができれば幸いだと思う。

今回の用例調査分析に考え不足が多くあると反省している。そして、連体節のテイルとテイタの意味の相違についてはまだ多くの課題が残されている。たとえば、以下はテイルの用例である。

(40) ところが去年の十一月、突然発表された山一証券の自主廃業決定のニュースは、サラリーマンが置かれている状況を根底から変えてしまいました。まず第一に、山一証券ほどの大金融機関でもいきなり倒産してしまうほど、日本企業が脆弱な体質に陥っていることが浮き彫りになってしまった。（『正しい会社の辞め方教えます』）

連体節の状態と主節の状態と対照的な関係にあり、格関係が一致していないということが観察される。このような格関係一致しない場合、連体節のテイル、テイタとの区別およびその原因をさらに追究する必要があると思われる。これを今

後の課題としたい。

参考文献

- 秋月康夫 (2003) 「「ていたところ」が表す局面としての「途切れ」相」『日本語教育』(117) pp. 53-62.
- 庵 功雄 (2001) 「テイル形／テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4、一橋大学
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (監修：白川博之) (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 伊坂淳一 (1997) 『ここから始まる日本語学』. ひつじ書房
- 岩崎卓 (1998) 「連体修飾節のテンスについて」『日本語科学』(3) : pp.47-66 国立国語研究所.
- 王守利 (2014) 「実質名詞修飾節におけるテイタに関する一考察」『人文社会科学研究』(28), 千葉大学大学院人文社会科学研究所 pp.190-204.
- 加藤万里 (2005) 「日本語の制限・非制限修飾に関する一考察」『日本語文法』5-1, pp.3-19, 日本語文法学会.
- 金水敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』. ひつじ書房.
- 江田すみれ (2013) 「「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト—異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法—」くろしお出版
- 砂川有里子 (1986) 『日本語文法セルフマスターシリーズ2 する・した・している』. くろしお出版.
- 高橋太郎 (1994) 『動詞の研究 動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房.
- 高橋太郎他 (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 1～その 4」『日本語・日本文化』4号-7号 大阪外国語大学留学生別科. (寺村 (1992) 『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』に所収)
- 寺村秀夫 (1984) 『シンタクスと意味 第Ⅱ巻』. くろしお出版.

中嶋孝幸（1995）「現代日本語の連体修飾節における動詞の形についてール形・タ形・テイル形・テイタ形ー」『人文論叢』三重大学人文学部文化学科研究紀要. pp.23-32.

日本語記述文法研究会（2007）『現代日本語文法 3 アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版.

日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版.

藤井 正（1976）『動詞+ている』の意味」金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 pp97-116

益岡隆志（1997）『新日本語文法選書 2 複文』くろしお出版.

三原健一（1992）『時制解釈と統語現象』くろしお出版.

三宅知宏（1995）「日本語の複合名詞句の構造ー制限的／非制限的連体修飾節をめぐってー」.

『現代日本語研究』(2) : pp.49-66 大阪大学現代日本語学講座.

山田小枝（1984）『アスペクト論』. 三修社

用例出典

『中日対訳コーパス』（2003 第一版）（北京日本学研究中心）

:『あした来る人』井上靖、『坊ちゃん』夏目漱石、『越前竹人形』水上勉、『蒲団』田山花袋、『鼻』芥川龍之介、『黒い雨』井伏鱒二、『青春の蹉跎』石川達三、『ノルウェイの森』村上春樹

電子文庫:『赤い指』『探偵ガリレオ』東野圭吾、『点と線』『証明』松本清張、『人間の証明』森村誠一、『氷点』三浦綾子

新潮文庫:『沈黙』

『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言』

『毎日新聞 95』

(おう・しゅり: 千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程)